
頭脳明晰夢遊病

しいたけ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頭脳明晰夢遊病

【Nコード】

N54270

【作者名】

しいたけ。

【あらすじ】

最近、明晰夢に凝っている。

最近、明晰夢に凝っている。

それが何かと訊かれれば、「慣れてしまえば楽しい夢だ」と言うだろう。ある時は空を飛び、ある時は海を歩き、またある時は大きな犬と会話し、それらの時間を年単位で操ることができる夢。寝ている僕の脳を抉りだして機械的に解析したとしたら、さぞかし活発に動いていることがわかるだろう。アルファ波だか、ベータ波だかもっとすごい何かも出ているかもしれない。それだけ活発に脳を働かせている。小説やドラマ、映画や漫画の創作物から、ツーリングなどの旅行や、街のクラブ、風俗にも手を出し、夢で考え得る可能性を広げたりもしている。

そして毎週土曜日の夜に、決まって明晰夢を見る習慣がある。本気で明晰夢を楽しもうと思ったらかなりの体力をつかうのだ。次の日が平日では少しばかりの窮屈感を受け、切迫した気分になり、夢も楽しいものではなくなってしまう。

もっとも、どれだけ体調が良くても素晴らしい夢を見られるのかといえば、そういうわけでもない。

夢は僕の映しで、写しなのだ。そのときの精神状態や現実に残された立場によって、常に変動する可能性を孕んでいる。それは無意識的な要素で、明晰夢の中に存在するイレギュラーの一つにも発展するものだ。僕の無意識がイレギュラーというのもいささか不自然なものだが、そういうものだ。

さあ寝よう、やれ寝よう。体の力を抜いて、じわりと額に神経を集中させる。

明晰夢の始まりだ。

私は街の中で大蛇に追われていた。我が国最高の研究機関で事故が発生し、サンプルとなった実験動物が巨大化、さらに凶暴化した

のだ。

自前の軽自動車のアクセルを限界まで踏んで、コンクリートのビル群をへし折る大蛇から逃げる。前や横から逃げ遅れた人々が恐ろしい顔で私の自動車に触れようとするが、時速百キロ以上出ているこの鉄の塊、ぶつかれば撥ね飛ばされて終わりだ。

そうして、何人も何人も人を撥ねた。罪悪感は追われる恐怖心ですりつぶされた。大蛇は何故私を追うのか。逃げているからなのだろうか。そのまま大通りを走り抜け、ビルで埋まる街の外に出られるという時、正面に何かが見えた。白と赤のガードレールと、砲身がついた黒の塊、あれは戦車だ。車道を埋め尽くすように戦車に始まる兵器が並び、その隙間をガードレールと迷彩服の男たちが埋めていた。

これでは蛇から逃げられない。私は食われてしまう。横に並ぶ戦車の砲塔がこちらを向く。大蛇が私の背後に迫る。バックミラーは大蛇の黄ばんだ腹だ。正面は純粹な破壊と殺戮の壁だ。

そして、連続した撃音が鳴り響いた。私の車のフロントガラスはその瞬間に暗転し、がくりと車内は揺れ、慌てて思いきりアクセルを踏んだためにタイヤが高速で空回りした。何故だ。

浮遊感がある。もしかして、大蛇に呑みこまれたか。椅子に座る背中に吸い込まれるような感覚が及び、真っ暗な視界の中、私は落ちた。暗闇の中は弾力性に富んでいたらしく、いつの間にか半分潰れていた車は跳ね続け、私は天井に何度か頭をぶつけ首がへし折れた。

静かになった。

「ああ、そういえば」

これは夢だった。それを認識した段階で、もう何も怖くはない。僕は折れた自分の首を戻し、ひしゃげた軽自動車を降りた。

蛇の体内には生の肉と似た色の扉があり、僕はその扉を開く。中は寝室で、小さなランプが部屋の隅に灯っていた。中心には質素なベッドがあり、僕のお気に入りの毛布があった。

毛布にくるまり、僕は身体を休めようと思った。
さあ寝よう、やれ寝よう。体の力を抜いて、じわりと額に神経を
集中させる。

明晰夢の始まりだ。

俺は初めてのスカイダイビングを楽しみにしていた。今日やっと
安くて安全な人気会社の予約が取れて、それはそれは浮ついた気分
になってダイビング用の飛行機に乗るわけだ。

準備はいいですか？ とインストラクターが俺に言った。頷くと、
彼は俺の後ろに回り、金具をつけて背中にくっつくついた。こ
れで命の保証はされるわけだ。窮屈だが、仕方がない。インストラ
クターがもぞりと俺の背中では何か動いたのを感じた、すると乗って
きた飛行機後部のハッチがゆっくりと開いた。吹き荒れる冷たい強
風が俺の顔をしきりに叩いて、目が乾く。歩いてハッチの端に手
つき、地面を見た。さらに目が乾いた。

眼下に広がる大地は地球のほんの一区切りコマでしかないが、
とんでもなく壮大なものに見えた。高さは五千メートルらしく、視
界に入る全てが小さい。まるで神にでもなったような気分だ。ここ
から飛び降りるとなると怖くもあるが、表現しきれないほどの期待
もある。

俺は背後のインストラクターに合図を出して、飛び降りた。

浮遊感がある。即座に来た全身をてのひらで強く押し返すような
奇妙な感覚を堪能しようと思ったが、それ以上に俺の意識は高揚し
ていた。胃がひっくりかえるような、腸が回転でも始めそうなこの
異様な感覚に五感を注がれ、迫る地面と睨みあい、そこには俺だけ
の世界と空間と、静寂に似た無為な大海、途方もない虚空が押し寄
せ、弾け散りそうな脳への興奮が迷路を走る怒涛のように錯綜し、
ただ一点、死と快樂の狭間にねじ込まれた。

気持ち良かった。風を切る音しか聞こえなかったがそれこそが
快感だった。このまま天国にでも逝ければどれだけいいだろうか。

本心からそう思う。

そこで急に、インストラクターが俺の体を叩いた。確か、体を叩いたらパラシュートを開く合図だった。俺は応えなかったが、勝手にインストラクターがやってくれるだろう。

無視して落下に興奮していたが、三十秒が経ってもパラシュートは開かなかった。何かあったのかと思うが、気にするのも面倒だった。

そのまま地球を見つめていると、着陸予定の草原に何か白い鞭のような物体が見えた。うねうねと蛇のように高速で移動し、芝生の上を這っていた。今の高度はまだそれなりのものはあったが、目算ではそれはかなり大きなものだ。一体何が這っているのか目を凝らすと、蛇のようだと思っていたがやはり蛇だった。蛇は俺の落下に気付いたのか、こちらを向いてルビーのような赤の瞳を煌めかせ、大きく口をあけた。

まさか、喰う気が。

俺は慌てて背中中のインストラクターに声をかけるが、言葉が届いていない。何をやっているんだ、さっさとパラシュートを開いて逃げろ。俺は死にたくない。お前も死にたくないだろう。

迫る、迫る、蛇の口。喉が赤く、美しい。牙は白く、美しい。しかしあの中には死しかない。それだけは嫌だ。絶対に嫌だ。俺は死にたくないのだ。

そして為す術なく落ちた。蛇の喉の奥ではなく、蛇の下顎に落ち、俺の体はへし折れた。落下の反動で体はバウンドし、上顎の白い牙に、脇腹からどすりと突き刺さった。もう反対側の脇腹から、俺の血で染まった柱のような赤い牙が飛び出して、血がこぼりと口から漏れた。インストラクターは既に俺を繋ぐ金具を外していたらしく、叫び声をあげて蛇の喉奥に落ちていった。

「ああ、そういえば」

これは夢だった。それを認識した段階で、もう痛みもない。僕は体を貫通した牙を抜け出し、蛇の喉奥へ飛び降りた。

転げ落ちた蛇の体内は鮮やかなピンク色で、インストラクターの姿は見えなかった。ぼんやり肉壁をさまよっていると、黄色いドアが目に入った。少し奥にもう一つ扉が見えたが、手前のほうに入ることにした。扉を開けると中は寝室となっていて、大きなランプが部屋の四隅で点灯し、丸いベッドが置かれていた。その上にはお気に入りの毛布と、使いなれた枕があった。

毛布にくるまり、枕に首を置いて、僕は身体を休めようと思った。さあ寝よう、やれ寝よう。体の力を抜いて、じわりと額に神経を集中させる。

明晰夢の始まりだ。

目を覚ますと、まだ暗かった。時計を見るとまだ六時で、目覚ましを設定した六時半には早い。二度寝するのにも微妙な時間だし、僕は毛布にくるまったままごろりと寝がえりをうった。

随分、頭が重い。昨日は何をしていただろうか、悪い夢でも見たのだろうか。そういえば以前明晰夢なんてものを試してみたけど、なかなか成果は出なかった。悪い夢ばかり見て、金縛りにも遭った。自己暗示の一種でもあるし、あまり癖にすると危険だろう。

ごろりとベットから降りて、時計を見た。六時二十六分。いい時間だ。リビングに降りよう。

「おはよう」

母さんに挨拶をすると、早いね、と言われた。僕は適当に返事をして、洗面所に行つてから食卓についた。食卓にはトーストと目玉焼きとサラダが置いてある。朝のニュースをぼんやりと眺めながら、朝食を食べ終えた。

部屋に戻つてまたベットに転がり、掛け時計の針の音を三百回ほど聞いた後、学生鞆に今日の時間割通りに教科書を入れる。月曜日の朝はどうも、けだるい。

駅に向かい、電車を待ち、友人を見つけて学校に行く。これぞ一般的な学生だ。いつかこの生活が終わってしまうことを思うと、憂

鬱な気分になる。学校を卒業してしまえば、電車に揺られて生気のない目で俯く若い女性のように、文庫本を開いているのに全く読み進めていない中年の男性のように、自分の足元ばかり見る虚ろな生活を無為に消化していくのだ。友達とくだらない話で笑うのも今だけなのかもしれない。勉強が面倒だからといって投げ出し、惰眠を貪るのもきつと今だけなのだ。僕らがこうして学生として自由であることは多大なる幸福であり、怠惰な時間を食いつぶすことはそれだけで身を肥やす糧となる。こんな気楽な今が永遠に続けば、今さえあれば。そう思ってもそれは叶わない。なぜならこの高校生の僕は、思いはするがそれを望んではない。

降車駅についた。友人と電車から降り、学校へ向かう。

「おはようございます」

校門前で生徒会員が列をなしていた。朝の挨拶運動というやつで、彼らは嫌々頭を下げている。

「もつと頭を下げる、媚びへつらう様に視線を向ける」

これは夢なのだ。思い通りにいかなければ納得がいかない。それも高校生のガキ共に、どうして面倒くさそうな顔を向けられなければならないのだ。僕は並ぶ生徒の頭を次から次へと殴って地面に這いつくばらせた。

現実でこんなことをすれば瞬く間にリンチに遭ってしまうだろうが、ここは僕の夢で、僕の世界だ。何をしても誰かに咎められることはないし、反抗しようなどという人間はいない。そうだ。たまには学校のトップというものに君臨してもいいだろう。

「下がれ、退け」

この行動を見る人間は、僕を傍若無人な人間だと評価するのだろうか。この脳内世界では、彼らには僕に対する意識はあるものなのか。明晰夢に在る全ては僕の脳の範疇にしかないのだろうか。わからないものだ。周囲に居る生徒を捕まえてそれを尋ねても、僕が無意識で思っている答えしか返って来ない。真実は、また別だ。真実が別にあると思ってしまうから、別なのだ。

友人を蹴り転がしながら生徒玄関に向かう途中、後ろから肩を叩かれた。

「久しぶりだね」

振り返ると、男が居た。

先程電車の中で見た背広の集団の一人だろうか。見覚えのあるようなくたびれた面をした男性だ。瞳だけは蛇のような威圧感を持って、僕の体を固めた。蛇に見込まれた蛙というのはまさにこのことを指すのか。

「ああ、あなたは」

彼は突然、無表情に僕の腹を殴り、姿勢が崩れたところで僕の顔面に膝蹴りをくわえ、胸倉を掴むとガラス張りの生徒玄関へ向けて凄まじい力で投げ飛ばした。僕の意識はガラスが割れた音が聞こえた段階で朦朧としてしまい、せめて視覚だけでも、と目を見開いた。突き破れた生徒玄関の先は途方もない長さの廊下が一本だけ伸びていた。白の壁、白の床、白の天井が真っ直ぐに伸び、果ては見えない。この夢らしく突拍子のない景色の移りに僕の思考は固まりかけた。

「勘違いだとは思っていませんでした」

僕は男性に言った。廊下の先を一点だけ見つめて、迫ってくる男性の方は見なかった。

「君達は本当に勝手だ」

彼は言う。すると廊下の向こうから、やはり白蛇が這ってきた。廊下をちょうど埋める、人など軽く呑みこんでしまいそうなほど巨大な蛇だ。僕の体は既に投げ飛ばされた段階で壊れていた。見動きは取れない、逃げる理由もない。

「次に行こう」

いつの間にか外れかけていた顎のせいであんぐりと開いた僕の口に、彼は拳を突き入れた。それとほぼ同時に大口を開けた蛇が、廊下の向こうから高速で這い寄り、僕と彼を飲みこんだ。

彼もなかなか、忙しそうである。

人を殺したくらい、人を喰らったくらい、絞め上げ、炙り、切り刻み、髒り、殴打し、碎き、突き落とす、投げ捨て、踏みつけ、轢きつけ、撥ね飛ばし、埋めたところで、なんの罪があるというのか。何が倫理だ、何が秩序だ。人にはそれが必要か。

いや、必要なだろう。

何故今、首に縄をくぐられ群衆の目に晒されているのか。考えるまでもない、殺してきたからだ。思いつく限りの方法で目についた人間全てを殺した。証拠隠滅などする気もないし、どうせ捕まるのは目に見えていた。誰かが止めるのを待っていたわけではない、止められるのを望んでいたわけでもない。殺したかったから殺し、逃げるつもりがなかったから逃げなかった。

破壊衝動とも言えるか。殺人衝動とも言えるか。どちらにしろ、人の生きる世には必要ないものである。わかつてはいても、それがおれだ。

「殺せ！ 殺せ！」

普段は野球やコンサートが行われるドームの中、人垣の中心でくられたおれに向け、怒声が飛ぶ。

「殺せ！ 殺せ！」

そこから波紋のように言葉の渦は広がり、瞬く間に空気を殴りつけ、こちらに向いた圧力に変わった。くぐられた首の縄がさらに強く締めつけてくるような錯覚に囚われ膝が震えた。足元には開閉式の床があるのだ、これが開いた瞬間に吊られ、死ぬ。

醜い死体になるだろう。情けない姿を晒すのだろう。それならば、華々しく散るのも一興というものではないか。

おれの奥歯には爆弾が仕込まれている。本来なら手持ちがない時に口から取り出して爆殺させるための道具であるが、自らの口の中で爆破することも不可能ではない。

かこりと舌で奥歯を抜き、ころりと舌の上に乗せた。あとはこれを勢いよく噛みつぶせば、頭が飛び散るだろう。

「殺すな」

その瞬間、口の中から白肌の腕が生えてきた。指の先にはおれの爆弾が乗っていて、群衆は静かになった。

そうか、成程。

これは夢だった。随分と簡単に事が運び、おれの意のままに人が死ぬのはいささかつまらないな、とも思っていた。この場でおれが自爆することも、どうして身体検査もなく、障害なしに通ったのかこれで合点がいった。

「しかるべき場所に」

腕は言う。

「死んだほうがマシだったよ」

おれの口は塞がっていたが、声だけは出た。

腕はおれの首にかかる縄を指先で千切る。同時に、足元の床が開き、おれは落ちた。長い長い落下で、着地と同時におれの体は気持ちの悪い音を立てた。

落ちた先は赤く、おれが切り裂いた妊婦の腹のようで、ドームの地下の様相を呈してはいなかった。まるで生物の体内だ。とりあえず周囲を見渡したが、奥行きがあることしか確認できず、それ以上は動けなかった。

ごきり、とおれの腹の中で肩の間接を外したような音がした。口から飛び出したままの白い腕がさらに太く大きくなり、白い指先を蜘蛛のように蠢かせ走りだし、おれのくたびれた体を無理矢理引きずった。

ずるずると引きずられながら、おれは赤い壁にいくつか扉を見つけた。

一つは黄色く、一つは黒く、一つは赤く、一つは緑、一つは桃色で、どれも肉のような壁面には似合わない無機質なものだった。

腕はさらに奥の、水色の扉の前までおれを運んできた。そこからばきばきと腕を伸ばし、ドアノブを掴んだ。

中は狭く、隅に布団が敷かれていただけだった。おれは違和感を

覚えたが、そのまま腕に引きずられた。腕は砕け散りそうなおれの体を布団の上に寝かせると、口から飛び出していった。

腕は蛇のようにうねうねと部屋を這いずって、やがてドアを閉めて出ていった。

静寂が訪れた部屋の中、おれは布団の上で目を閉じる。他にやることも思いつかない。

適当な夢でも見つけて、遊んでみるか。

絶海の孤島には何も無い。やたら広い無人島なのだが、私は人間だ。食料は魚でも釣る。ちよつと山に行けば山菜もある。食うに困らないし、解放感も素晴らしいものがあるともいえるだろうが、何もない。

旅客船が沈没した際、気付いたらここに居た。私以外に誰も人間は居なかった。退屈といえば正しいのだろうか。その感情すらも腐敗してしまっている。あまりにも何も無さ過ぎた。野生に生きる動物と等しい生活しかしていない。腹が減ると食料を獲り、眠くなる。と寝て、ふと太陽に当たる。人間の生活ではないだろう。

今日も私は食料の確保に出た。最初は保存食でも作ろうかと息まいていたが、次第に面倒になり、必要な時に必要な量しか獲らなくなった。おそらくそれが自然なのだと、私の本能が訴え出したのだ。たまには新境地の開拓にでも、と歩きまわる。道なき道の茂みを割っていくと、見たことのない水場を発見した。

南国でしか見られないような極彩色の花々が咲き誇り、土も健康的な茶色を示して、岩の隙間から注がれる清流による小さな池を彩る。すぐ隣には、大きく平たい岩がベンチのように置かれていた。私もほどほどに歩き疲れていたので、そこに座って休憩することにした。

水が池を叩く音を肅々とした気分で聞く。こうして何かに対してじつくりと構えるのは久しぶりで、妙な気分になる。やはりこうすることは、自然界においてはイレギュラーな行動なのだろうか。実

際のところ、「時間を無駄に過ごす」という感覚を覚えるのは人間にしか感じ得ないことだろう。人間だけは生きる上での無駄を多分に知っているから、無駄を享受しないことを無駄だと感じるのだ。それこそ無駄ではないか。いいや、考えることすら無駄だろう。無駄という概念すら無駄。無駄だという言葉が無駄だ。

なんて、切りようのないことを考えていてもしょうがない。

「おや」

ちょうど座った私の正面にある岩と地面の隙間のあたり、尖った草葉に隠れた小さな穴があった。よく見てみると少し湿っていて、入り口は泥っぽく、何かが行き来しているような跡がある。あまり自然界の知識に精通しているわけではないが、動物の巣であることはわかった。

今日はあの中のヤツを食おう、私はそう思った。その辺りにある適当な木の枝を折って、穴の手前でしゃがみ込む。奥まで突っ込んでいけば、驚いて出てくるだろう。棒を入れる。ごそごそと入れる。かき回す。かき回す。届いていないかもしれない。さらに腕を突っ込み、泥の感触を肌に塗りながら、さらにぐりぐりとかき回す。そこで急に突っかかりを感じた。枝に抵抗がある。さらに突き刺すように腕を入れると、それ以上進まない。弾力性もある。

獲物だ。

出てこい、出てこい、私がお前を食ってやる。生きる意味を与えてやる。私の糧にしてやる。要するに腹が減ったのだ、あまり時間をかけさせるな。火を起こすのも手慣れたものだが、最近は乾いた草を探すのすら面倒だ。さあ来い、さあ来い、お前を食わせてくれ。「おっと」

手に持つ枝にずしりと重みが来た。おそらく獲物が喰らいついたか。私はゆっくりと巣穴から腕を取り出して、枝の様子を確かめる。「なかなかうまそうな獲物だ」

思わず声に出した。枝には白い蛇が巻き付いていた。太めの体に、赤い目をした蛇で、同じく赤い舌をちろちろと出し入れしている。

元氣もありそうで食ってやると精力が付きそうだ。

私はそのいつの首根っこを潰してやるくらい思いきり掴んで、口の中に枝をねじ込み突き刺し、湧き水で軽く洗った。

そそくさと自分の住処に戻る。普段使っている火起こし用の棒と拾った平たい石を取り出し、枯れ草をその石の中心にまとめて乗せる。縄の類でもあれば火起こし用具を作ることできたのだが、やはり面倒になった。植物の根を束ねでもすれば代用ができるかもしれない。しかし、面倒なのだ。その場しのぎで生きることには私は意味を見出そうとしている、と言い訳をしておこう。

種火を起こして、枯れ草に一気に着火した。それをさらに拡大させるため、枝をまとめた中に放り込む。

煙がもくりと生まれたところで、もう絶命した蛇をあぶる。私は無表情にその姿を見つめつつ、焚いた火の前に座りこんだ。

この蛇にも暮らしがあつたのかと思うと、私も妙な気分になる。家族はあつたか、と訊いてやりたい。あつたなら、私にもあつたと世間話でもしようか。なかったなら、私には家族がいたと自慢してやろうか。

故郷を想いつつぼうつと火を見つめていると、香ばしい匂いがした。蛇が焼けたのだ。枝を火から避け、手元に持って来る。じつくりと眺めると、こんがりと焼けて煤がほどよくこびりついている気がする。

空腹に釣られる。そうだ、多少生でも腹を壊すだけなのだ。

私は白蛇の腹に向け、大口を開けてかぶりついた。

噛みきって咀嚼すると鶏肉のような触感、もとい食感が齒にめり込んだ。調味料でもあるとよかったが、これも悪くない。夢中になつて蛇をむさぼる。

「？」

その最中。

がり、と変に硬さのあるものを噛んだ。骨でもあつたか。

口に残った硬い物体を手のひらに吐き出す。そこには七色の宝石

のようなものがあつた。赤、黄色、緑と、ピンク色、水色、黒と。あとは白、いや、もともとこれは透明だったのか。とにかく、こんなものがこの島にあつたとは意外というか。それぞれプラスチックのようにも見えるが、これは一体なんだろうか。

まあいい、今は蛇を食べきつてしまおう。

そのまま蛇を食べて骨にすると、急に眠気に襲われた。なかなか私も、この島の生活に慣れてきてしまったらしい。

はっと目を覚ました。

今回の夢も長々と、やたらめつたら支離滅裂なものを楽しんだ。うむ、もう二、三年、遊んでいくのも良かったかもしれない。

ベッド脇のデジタルの目覚まし時計を見ると、今日は十月の十日、日曜日。時間は午前八時で、薄手のカーテンの隙間から日光が僅かに射している。陽に照らされる室内は、女つ気のない散らかったワッフルームだ。

明日、第二月曜日は体育の日だが、僕の会社は平日と同じく運行する予定だった。もともと三連休には期待していないから、仕事のペースが乱れなくていい、と考えるのが一番健康的だろう。

というわけで、この日曜日は何をしようか。彼女もいないし給料日も遠く、特に出掛ける用事がない。

まずはテレビをつけて、ニュースを適当に眺めた。朝食は面倒だが、空腹こそ気分が悪い。テレビのキャスターが忙しなく原稿をめくる姿を眺めつつ、僕はベッドを立った。

「アメリカの研究所で事故が発生し……」

テレビの音をBGMに、キッチン下の棚を開けた。ううん、朝からカップラーメンは重すぎる。胃がもたれてしまう。他に何かないかと探してみると、レトルトカレーのパックがあつた。

適当に米でも炊いてカレーを食べよう。カレーなら重くはない、はずだ。

米をといで炊飯器にセットする。ベッドに戻って、テレビをまた

漫然と眺めた。どうやらオーストラリアでスカイダイビング事故があったらしく、日本で名を挙げ始めた若社長が亡くなったそうだった。僕には関係ないが、スカイダイビングというものはフルシーズンで行われているものなのか。ああ、ご冥福を。

なんとなくチャンネルを変えた。流れていたのは特撮番組だった。教室のワンシーンで、学生服の高校生がヴィジュアル系バンドのような変なメイクをし、他の学生たちに対して偉そうに振る舞っていた。僕の考えるところ、彼は悪者にとりつかれて乱暴になったとか、そういう流れの話だろう。特撮ものは僕も昔よく見ていた。

せっかくだからと、何年かぶりに変身ヒーローの活躍を見てみようと思ったが、途中で演出が鬱陶しくなっただけでワイドショーに戻した。ちよと米も炊けそうだったので、流しで顔を洗った。トイレに行つて戻つてくると、ワイドショーは特集企画を始めていた。

「無人島の仙人に突撃取材！」と、昔のバラエティ番組のような原色でベタベタしたテロップが画面一面に現れた。無人島に人が居たならそれはもう無人島ではないではないか、と思ったら、スタジオの芸人もまったく同じことをツッコんでいた。

なんとその仙人とやらは、四十年もその島に暮らし続けているらしい。戦争がきっかけで祖国に戻るタイミングがなく、戦死者として扱われたいたそうだった。家族はもとも居らず、自力で帰ることが不可能であると判断して、島に暮らすことを決意したらしい。なんという根性だろうか。

と、感心して眺めていたら、地元の漁師と月に一回程度コンタクトを取っていたらしい。結局、発展途上国だからこそ、の話だったようだ。それはそれで面白い。

「……………おかしい」

おかしい。

勝手に口から声が出た。僕は別に、何かに対しておかしいとは思ったわけではないし、無意味に「おかしい」と口に出すようなことは何もない。

これは、おかしい。

いや待て、少しだけ。

僕は昨日どんな夢を見た。普段なら何を見たかを思い出せるはずだろう。何を見た。何を想像し、何を創造して楽しんだ。考える、考えるな、ありのままを思い出せ。これは変だ。夢で空を飛んだ記憶もあった、海を歩いた記憶もあった、犬と会話した記憶もあった。『明晰夢を操った』という記憶は、常に存在していた。ならばこれはどうということだ。まだ夢を見ているのか。

「……おかしくないな」

そんなわけがないか。思い出せない夢なんてよくあることだろう。今回は数年遊び、僕はあと二、三年遊んでも良かったかもしれないと思ったことは確かではないか。

寝起きの体や頭に倦怠感が無いのも、それくらいの余裕があったからだ。

その時ちょうど米が炊けた。

特に米を美味しく食べようなんて思っていないので、さっさと炊けたものを皿に盛り、レトルトのカレーを乗せ、ラップをかけてレンジに入れる。パッケージによれば温め三分だ。

テレビに視線を戻すと仙人の特集は終わって、番組で毎度行われているゲスト企画が始まっていた。テレビの手前のテーブルに置いたままにしてあった財布をなんとなく開くと、残金がほとんどない貯金を降ろすついでに買いものにも行こう。

昼前の散歩はなかなか気分が良かった。そろそろ肌寒くなる頃だが、日差しはさんさんとしていて過ごしやすい。犬の散歩をしている人とすれ違うたびにのんびりとした気分になる。

すれ違う、すれ違う、すれ違う。柴犬、ドーベルマン、ブルドッグ、チワワ、チワワ、チワワ、チワワ。今日はチワワが多いようだ。チワワ、チワワ。ペットは世話が大変そうだが、僕も余裕があれば飼いたいものだ。鳥とか、チワワなど。

「こんにちわわ」

「こんにちわわ」

道行くチワワに挨拶をすると、飼い主の中年女性に笑顔で返された。僕はその笑顔を見つ、スーパーに入った。店内はほどほどの混み具合で、野菜コーナーには安売りの大根が大量に並んでいた。まるで不快な笑顔を見せてきたさっきの中年女性の足のようで、僕は突然金を引き出していないことに気付いた。ここにATMはあったのだろうか。

発見したATMから戻ってきて、カゴを手取る。今日のご飯は何にしよう。

適当に中年女性の足を担いで、スーパーの出口に立った。

「雨か」

雨だ。

先程まで太陽が出ていたのに、いつの間に。自動ドアが何度も開閉して、汗ばんでいるかのようにガラスを濡らしている。毎日毎時毎分と客の為にしきりに働かされて彼も大変なのだ。

何かないかと傘立てを見ると、真っ白な傘を見つけた。僕は早足でそれを奪い、傘を開いてに外へ出た。

「待ってください」

背中がかった。無視した。

「待ってください、それは私の傘ですよ」

傘に当たる雨の音で、その女性の声は遠ざかる。

「待ちなさい」

そう思っていた。

「なんですか、これは僕の傘です」

「違います、私の傘です。これは私が傘立てから盗もうとしていた傘なので、盗ったあなたは盗人です。返してください、女性を雨に濡らせて帰るなんて薄情だとは思いませんか」

女性は背後から接近して、開いた傘の中に入ってきていたようだった。びたりとすぐそこにいるらしく、振り返る隙もなかった。

「そんな横柄な人間を女性だと思ったことはありません。申し訳ありませんが急いでいるので失礼します」

大股で歩くが、真後ろの気配は変わらない。

「離れてください」

「嫌です、濡れて帰りたくありません」

変わった人も居るのだなあ。

僕はそのまま家に帰った。

「それでは、僕の家はここなので」

「それなら、傘を渡してください」

僕は頷いて、開いたままの傘を渡す。アパートの手前で軽く手を振ると、女性も傘を持った手を振り返してきた。

「あ」

「あら」

すると、傘が折れた。女性は青い顔になって僕の方を見た。無視して階段を上がり、自分の部屋の前に行く。

部屋に入る直前、少しだけ女性の様子を盗み見ると、既に居なかった。

折れた白い傘は開いたまま道路にひっくりかえっていて、内側に妙な模様が描かれているのがわかった。傘の白地に、木の葉のような赤い印が二つ。蛇の瞳のようだといえどもとも適切だろうか。

「濡れてるな」

部屋に戻る。手元では、傘の範囲からはみ出していた中年女性の足が買い物袋と共に濡れていた。このまま冷蔵庫に入れても傷んでしまう、今日は一日中これを食べることにしよう。安売りであったのだから下手なものを選ぶよりは食費が浮く。

包丁を取り出す。足の皮を剥がしてやって、適当に茹でて味付けすればどうにでもなるだろう。

数度切り刻むとまな板が血まみれになり、鉄分だか脂だったかで包丁の切れ味も落ちてきそうだ。すぐに捌いて洗った方がいいかもしれない。

「いや……おかしい」

安い大根を切っているだけなのに、空腹からか全く意味のわからないことを考えていた。しかし何故まな板が赤く濡れているのだろう。間違いないく切っていたのは大根だ。

違う。

何が違う。

何かが違う。

「ああ、成程」

これは夢なのだ。

行動と思考と提示される結果が結びついていないのはそういうわけだ。無意識に拡散した意識が夢に介入した。その、結果、だと、思う。

しかし、ならばこれはどこの夢なのだろうか。

僕が夢であることを自覚したというのに、目の前の現実が変わらない。血に濡れたまな板と、つけっぱなしになっていたテレビ。そしていつもと変わらない寂しいワンルーム。

掃除。

しかし掃除が行われない。

おかしい、おかしい。

昨日見た夢、思い出せない夢、そもそも僕は昨日夢を見ていたのか。夢の中で夢を見ることなどよくあることではある。それが主目的で動いたこともある。それによって頭を整理しようとしたことも、人格を矯正しようとしたこともある。何度も何度も潜り、眠り続けたこともあった、が。

「そうか、まだ殺し足りなかったのか」

合点がいった気がした。

僕は、僕を殺しきっていなかったらしい。

明晰夢に嵌まると、夢の中で動きまわった人格と現実の自分が噛み合わないことがある。

それに気付くことなく目を覚まし、誰かに指摘をされてから、ようやく自分がおかしかったことに気付く。正確に言えば僕の内部に存在する意識が現実にとぐわないう期間だけ頭を働かせていただけであるためおかしくはないが、世間からみれば突然人が変わっているのだからおかしい。たとえば異様に余裕があったり、変に落ち着きすぎていたり。

最初はその程度だ。

しかし明晰夢に凝り過ぎると、僕は期間による変化ではない、「全く別の自分」を夢の中で展開させることがある。たとえば無邪気な子供、間抜けな貧乏人、マッドサイエンティスト、ポジティブな若い男、美人な女、威張り散らす老人。その人格で遊んだまま目を覚ますと、ややこしいことになる。

日常生活に戻り、その夢での人格が消えずに表層に残っていることを自覚してしまうと、作った人格をいくら否定しようとも、無意識に僕の深層に根差してしまう。

すると次以降の夢にも、生まれた人格が夢の中に生き続ける。それが重なり続けると夢が多数の意識によって混濁するため、夢で発生した人格を、現実で目を覚ます前に次から次へと殺していかなければならない。

現在僕が夢を完全に操ることができない原因は、おそらくこれは僕の夢でなく、別の人格が夢を見てこの世界を形成しているのだ。どれも僕の夢の中に在る世界であるため、誰が夢の中心に居たとしても僕の内の誰もが同時に存在することは可能であり、僕が人格を殺してきた方法もその応用なのだ。

ならば、今狙われているのは僕なのか。

そうなると僕は現実で表層に出す僕ではない可能性もある。僕の別人格が僕を殺そうとしている可能性もある。

しかし、いや、どうなる。

家のチャイムが鳴った。出ようか迷ったが、出ることにした。玄関に近付く。

「考えても無駄だと思いますよ。あなたはそうやって私達を殺してきたのだから」

ドアノブに手をかける直前、女性の声が聞こえた。すぐに理解できたが、さっきの変な女性のものだった。

「それは本当に僕ですか？」

僕はドア越しに訊いた。

「いいえ、あなたではないかもしれない。けれど私は、私達の誰かに殺されたのだから復讐しなければなりません」

復讐だなんて主張しても、もともと一人の人格を整理しているだけなのだから何も問題はない。

「となると、あなたは既に殺された？」

「いいえ、私は私達を完全には殺しませんでした。殺してもいずれはまた似通った人格が生まれてしまうので、私は私達の人格を閉じ込め、必要な時にだけ引き出せるようにしたんです。これ以上数が増えないように、管理体制をこれから作るつもりでした」

「では、どうしてあなたは閉じ込められていないのですか？」

「いいえ、私は私を閉じ込めました。この世界は私の夢の中です。大きな大蛇の腹の中で、砕けた体の痛みを忘れられず、私に復讐することにしたのです」

成程、彼女の言う「私」は、詰めが甘いらしい。

「さあ、ドアを開けてください」

「そんなことをしなくても僕を殺せるはずだ」

「それができなかったから、あなたは私を直接殺してきたのではないのですか？」

言われてみれば、と思っではみたが。僕の知ってる限りではそれも遊びの内だったから、だったはずだ。

いや、それは前提からおかしいのではないか。

僕はドアを開けた。

そこにはやはり先程の女性が居た。折れた傘の金属棒部分を持っただけで、髪が濡れていた。

「これはあなたの夢ですよ?」

「そうです」

「それはおかしい。なら、どうしてあなたは雨に打たれているのですか」

「雨が降ってきたからです」

「あなたは雨に濡れたくないのではないですか」

「あなたに話しかけるきっかけが必要だったのだ」

「では、もう雨は止んでいるはずですよ。あなたが体を濡らす必要などない」

彼女の背後で雨は降り続けている。

「……………」

「これは、あなたの夢ではありませんね」

女性は申し訳なさそうな顔をした。

「……………そうですね、その通りです。私の夢ではありませんが、私の夢ではありません」

「そもそもあなたに遭遇する前から変だった、気がするんです。しかしそうになると、あなたはどうしても僕に接触してきたのですか？」

夢だという自覚があるのは、夢を見た本人だけのはずではありませんか?」

「いいえ、きつかけさえあればこの世界が夢であると自覚するのはあつという間です。だから殺してやろうと思いました。それにその発言は、あなた自身が矛盾していると思うのですが」

「きつかけは?」

「朝のテレビです」

おかしい。僕はその時点で、夢の中に居たことを自覚していない。どうということだ。

「おかしくはありません。私がこのことに気付いたのは偶然のようなものだと思いますから」

「……………あなたは、僕の頭の中を何度か読んでいませんか?」

何を言っているんですか? そもそも私達は、まだ直接の会話を

一度もしていないではありませんか。

「え？」

女性は僕を見つめ、頷いた。

何が起こっているのかわからないが、とにかく彼女は僕と通じ合っていると考えればいいのか。一つの脳で全てを共有しているのだから、あり得ない話ではないが。

これでは僕は、排除すべき人格の存在を認めてしまっていることにはならないか。しかしそれはまた、別の話か。

「殺してませんよ、閉じ込めてるだけなので」

「ならばどうしてあなたは閉じ込められていると知っているのですか。おかしいとは思わないのですか。僕があなたを閉じ込めたのだから、なんらかの対策は講じているはずだ」

「その蛇の檻は夢の中の無意識、言うなれば人が本質的に必要とする欲求によつて壊れてしまったのですから、現状ではおかしいところは何もありません」

僕は何も知らないぞ。

「それで結局あなたは僕を殺すんですか？」

「今までの会話を考えていただければ」

彼女は折れた傘の骨の先を、僕にふらふらと向けてきた。

殺すのなら殺せばいいが、これは彼女の夢ではないのだろう。今までこんなことがあっただろうか。夢に存在する人格が夢の中の別人格を殺しにくるなんて。彼女はその異常さを、自覚してはいるのだろうか。

「殺すに、決まっているじゃないですか」

喉元を熱い感覚が走り抜けた。彼女は傘を、僕の喉に突き刺した。ぼたりと重く、血液がアパートの床を叩く。静かに降る雨の音はもう聞こえない。

やがて目の前で笑う女性の姿が、歪んだ景色と消え失せた。

ようやく目を覚ました白い部屋には、清潔なベッドと小さな棚、

棚の上には透明な水差しが置かれており、中の水は大きな窓の日差しによってぐにやりと照らされていた。ベッドと棚の横には丸椅子が置かれ、そこには一人の女性が座る。女性の目尻の皺は見たところそれなりの歳を刻み、頬には僅かなシミも確認できる。背中や肩は丸く縮こまり、少し疲れた様子に見えた。

「あの……」

かすれた声で言った。いつから眠っていたのか僕の喉は干乾びていた。女性は上体を起こした僕に、水を飲ませる。

「ありがとうございます」

「大丈夫？ 今からお医者さん呼ぶからね」

優しい声だった。女性は重そうな腰をあげてナースコールを押すと、笑いかけてきた。

「すいません……ええと、僕は……？」

「敦、全然起きなかったから。お医者さんに診てもらっても全然原因がわからなくて大変だったのよ？」

「……僕は、そうですか。敦、ですか」

「もしかしてあんた、自分のことわからないの？ 悪いことしてたわけじゃなかったみたいけど」

「いえ、夢で他人に名前を呼ばれることなんて今まで無かったんですと女性は青い顔をして席を立った。そのまま入り口まで歩いていき、部屋の外に顔を出したり引つ込めたりを繰り返して、視線も同様にどこを向くこともなく彷徨っていた。

「どうしたんですか？」

「お医者さん遅いね」

「どうせ来ないでしょう。このシチュエーションは何度も見ましたので」

「お医者さん……早く来ないかね？」

女性は突然目頭を押さえた。

どうせ僕の別人格、殺人願望の塊が、僕、もしくは俺、私のいずれかを殺しに来る。母の姿をしているかもしれないし、僕自身がそ

うかもしれない。死ぬ、殺す。考えるのも億劫だ。自分自身が生んだ自分の世界に、僕はもう追いつけない。僕が殺す僕は死にたくないから、無限に僕と同じ人格を産んで、僕に殺され切らないうちに増え続ける。けれど僕を殺そうとする僕も、同じくして増え続ける。脳内で延々と続くいたちごっこだ。

元の僕はもう殺されてしまっているかもしれない。本当は、僕を殺している僕が本当の僕なのかもしれない。そもそも、いつか僕が言っていたことは嘘かもしれない。あれが僕の意思の範疇にあったのなら、本来的には問題は無いはずだった。けれど僕は死にたくないと思ってしまうているのだ。殺されてしまうのが嫌だから他の僕を夢の中に作り出して消されることを避けている。そしてそれは、どの僕も思ったことに違いない。僕は僕を殺そうとしない僕とも話したことがあったが、いずれの僕も死にたくないと言っていた。何度も殺されるという事実は受け入れがたい。それも、同じ境遇に生まれた別の人格に一方的に殺されるなんて、認めてやれない。

もう寝よう。

とにかく寝なければ、脳内での夢の絶対数を増やすことができない。

ひたすら寝続けなければ、僕の人格は消されてしまう。

「敦！ 寝たらダメ！ あんたまた寝たら、次いつ起きるかわからないでしょ！」

母が目を潤ませて叫んできたが、僕の耳にはほとんど入らない。

母が僕なら、それこそ一刻も早く寝なければならぬのだ。

さあ寝よう、やれ寝よう。体の力を抜いて、じわりと額に神経を集中させる。

直後に僕の身を包んだのは、途方もない暗闇だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5427o/>

頭脳明晰夢遊病

2010年10月28日22時55分発行